

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 3月 31日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21520583

研究課題名（和文）仏語クラスにおける言語・文化に関する「表象」の（再）構築・伝達のプロセスの解明

研究課題名（英文）Analysis of the (re)construction and transmission processes of French language and culture “representations”

研究代表者

石川 文也（ISHIKAWA FUMIYA）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：60295524

研究成果の概要（和文）：外国語としてのフランス語のクラスにおいて言語・文化に関する「表象」の（再）構築・伝達プロセスは目標言語の「ことばの知」の伝達とどのように関わるのかを、「会話分析」の視点——会話参加者と対象物の関係、あるいはそれらに関わる「表象」はアプリアリには存在せず、ことばのやり取りの中で、あるいはそれによって初めて構築され、また再構築されると考えるダイナミックな言語インタアクションの視点——から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aims to clarify how the (re)construction and transmission processes of the “representations” of French language and culture are articulated through teaching and learning activities in the classroom. From a dynamic viewpoint based on conversational analysis, we showed that, like the teacher-learner relationship as well as the relations that these participants attach to the object, the “representations” do not exist a priori; they are constructed or reconstructed in and by in-class verbal interaction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：フランス語、クラス、表象、言語・文化、ことば

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究開始当初の背景には次のふたつがある。

（1）ひとつは、本研究代表者（石川）がパリ第三＝新ソルボンヌ大学外国語としてのフランス語教育論専攻博士課程在学中より所属する研究グループ Cediscor（一般および

特殊ディスクール研究センター）-SYLED（言語体系、発話とディスクール）、DELCA（教育のディスクール、接触の場のことば、言語習得／獲得）-SYLED、DELCA-DILTEC（言語、テキスト、文化の教育）でおこなってきた研究、さらに日本学術振興会平成15・16・17年度科学研究費補助金「萌芽研究」（課題

番号：15652036、研究課題：「仏語クラスにおける「知」の伝達プロセスについてのディスカール分析の視点からの研究」、単独研究、役割：研究代表者）でおこなった研究である。これらの研究において本研究代表者（石川）はフランス語クラスを取り上げ、そこに現れる言語インタアクションによって構成されるディスカールの中で、あるいはそれによって「ことばの知」が教師から学習者にどのように伝達されるのかを明らかにした。

（2）もうひとつの学術的背景は、同様の認識論的枠組みを援用して本研究代表者（石川）がおこなった、日本学術振興会平成18・19・20年度科学研究費補助金「基盤研究（C）（一般）」（課題番号：18520442、研究課題：「仏語クラスにおける会話参加者のアイデンティティと関係性の（再）構築についての研究」、単独研究、役割：研究代表者）および日本学術振興会平成19・20年度科学研究費補助金「二国間共同事業・セミナー日仏交流促進事業（SAKURAプログラム）共同研究」（課題番号：なし、研究課題：「日本人の仏語習得：「オモグロット」と「アログロット」のコンテクストの仏日比較研究」、共同研究、役割：日本側研究代表者）である。これらの研究では、本研究代表者（石川）は、同様にフランス語クラスを取り上げ、言語インタアクションによって構成されたディスカールによって、「ことばの知」の伝達と会話参加者（＝教師と学習者）のアイデンティティ（再）構築とはどのように関わるのか（「基盤研究（C）（一般）」）、また「ことばの知」の伝達はディスカールが発せられるコンテクストからどのような影響を受け、またコンテクストの形成にどのような影響を与えるのか（「SAKURAプログラム」）を明らかにした。

2. 研究の目的

上記「1.」に挙げたこれまでおこなってきた研究から、新たな仮説が導き出された。それは、言語・文化に関する「表象」は「ことばの知」の伝達にも、会話参加者間関係性（再）構築にも、さらにはディスカールとコンテクストとの相互干渉にも関与しており、言語インタアクションによってこの「表象」が（再）構築・伝達されることによって「ことばの知」に一定の意味（あるいはイメージ）が付与され、会話参加者間関係性（再）構築され、さらにはディスカールとコンテクストとの相互干渉にも一定の意味が付与されるのではないかという仮説である。本研究では、この仮説を考察の出発点とし、視点の中心を言語・文化に関する「表象」の（再）構築・

伝達プロセスに移して、これまでおこなってきた研究をさらに発展させた。

3. 研究の方法

まず、分析の対象となる会話を収集する。コーパス（分析資料体）は、すでにパリ第三＝新ソルボンヌ大学言語・文化教育論博士論文（Ishikawa 2001b）執筆のために収集したもの、日本学術振興会平成15・16・17年度科学研究費補助金「萌芽研究」および日本学術振興会平成19・20年度科学研究費補助金「二国間共同事業・セミナー日仏交流促進事業（SAKURAプログラム）共同研究」遂行のために日本国内のいくつかの大学で収集したものがあるが、分析結果にさらに一般性をもたせるために、国内外の外国語教育機関で広く収集した。会話収集にあたっては、transcript（テープ起こし）の際に発話の話者を特定しやすくするために、デジタルビデオカメラを使った。Transcript（テープ起こし）によってできたコーパス（分析資料体）は、ことばの検索をしやすくするために、データベースとしてコンピュータに保管した。テープ起こしの作業と平行して、フランス語教育論、「会話分析」、インタアクション、ディスカール分析、言語・文化に関する「表象」の研究に関わる基本文献（フランス語教育論、「会話分析」、インタアクション、ディスカール分析、言語・文化に関する「表象」に関する図書：本申請で申請する消耗品）の入手と（再）講読を進めた。また、作成できたコーパス（分析資料体）を、言語インタアクションの中で、あるいはそれによって、フランスの言語・文化に関する「表象」はどのように構築（あるいは再構築）されるのかという視点から分析した。

4. 研究成果

外国語としてのフランス語クラスは、単に「ことばの知」あるいはそれに関わる「社会的文化的知」の伝達ではなく、伝達行為を通して会話参加者（教師と学習者）の関係が（再）構築され、その（再）構築の作業を通じてフランス語の言語・文化に関わる「表象」も（再）構築される場であることを実証的に明らかにすることができた。特に、（1）「アンテラクショニスト」がこれまで主たる分析対象としてこなかった外国語としてのフランス語のクラスのディスカールを「記述のアクティビティ」という考え方から分析すること、（2）「ディスカール分析フランス学派」の主たる関心事であった知の伝達プロセスと、「アンテラクショニスト」あるいは「会話分析」の問題であった言語・文化に関する「表象」の（再）構築・伝達プロセスとの関連を明らかにすること、さらに、（3）そのように「アンテラクショニスト」と「ディス

クール分析フランス学派」との理論的融合可能性を思索しながら、境界領域に位置する問題をダイナミックに考察することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① ISHIKAWA, Fumiya (2011): “Répercussions du discours didactique sur les composantes « extralinguistiques » de la classe de langue: catégorisation des apprenants et description du contexte”, *Cahiers de sociolinguistique* n° 15, pp. 123-134 (査読有) .

[学会発表] (計6件)

- ① ISHIKAWA, Fumiya: “Enjeux disciplinaires de la formation des enseignants de FLE en situation « hétéroglotte » et extra-européenne: le cas du Japon”, communication présentée au Colloque international: « Formation et professionnalisation des enseignants de langues. Évolution des contextes, des besoins et des dispositifs », organisé au CIEP (Centre International des Études Pédagogiques) (Sèvres) par le groupe: FICEL-DILTEC (Formation Initiale et Continue des Enseignants de Langue(s) étrangère(s), contextes d'enseignement/apprentissage bi-/plurilingues et éducation plurilingue - Didactique des Langues, des Textes et des Cultures), de l'Université Paris III-Sorbonne nouvelle, 3 novembre 2011 (事前のレジユメの査読有) .
- ② ISHIKAWA, Fumiya: “L'académisme défié par le néolibéralisme: enjeux et perspectives de l'enseignement / apprentissage du FLE à l'université japonaise du 21^{ème} siècle”, communication présentée au Colloque international: « Apprendre les langues à l'université au 21e siècle », organisé à l'Université Pierre et Marie-Curie-Paris VI (Paris) par le groupe: « Tâches et dispositifs » - DILTEC (Didactique des Langues, des Textes et des Cultures) de l'Université Paris III-Sorbonne nouvelle et de l' Université Pierre et Marie-Curie-Paris VI, 9 juin 2011 (事前のレジユメの査読有) .
- ③ ISHIKAWA, Fumiya: “Discours du conseiller pédagogique en didactique du FLE: l'articulation de la formation de formateurs et de l'« agir professoral » en

interaction”, communication présentée au Colloque international: « Spécificités et diversité des interactions didactiques: disciplines, finalités, contextes », organisé à l'INRP (Institut national de recherche pédagogique) de Lyon (Lyon) par l'Université Lumière-Lyon 2 et l'UMR (Unité mixte de Recherche) ICAR (Interactions, Corpus, Apprentissages, Représentations) du CNRS (Centre National de la Recherche Scientifique), 25 juin 2010 (事前のレジユメの査読有) .

- ④ ISHIKAWA, Fumiya: “Enjeux de la didactique du FLE en contexte extra-européen et « hétéroglotte »: le cas du Japon face aux mouvements d'introduction du CECR”, communication présentée au Colloque international: « Quelle didactique plurilingue et pluriculturelle en contexte mondialisé ? », organisé à la Maison des Mines des Ponts et Chaussées (Paris) par l'équipe de recherche: PLIDAM (Pluralité des Langues et des Identités: Didactique, Acquisition, Médiations) rattachée à l'INALCO (Institut National des Langues et Civilisations Orientales) et par le CETL (Center for Excellence in Teaching and Learning) rattaché à la SOAS-UCL (School of Oriental and African Studies-University College of London), 18 juin 2010 (事前のレジユメの査読有) .
- ⑤ ISHIKAWA, Fumiya: “Le FLE comme matière universitaire en contexte « hétéroglotte » et extra-européen: statut académique et représentations sociales du FLE au Japon”, communication présentée au Colloque Forum Héraclès et Université de Perpignan-Via Domitia: « Le Français sur Objectifs Universitaires », organisé à l'Université de Perpignan-Via Domitia (Perpignan) par le Forum Héraclès et l'Université de Perpignan-Via Domitia, 11 juin 2010 (事前のレジユメの査読有) .
- ⑥ ISHIKAWA, Fumiya: “Répercussions du discours didactique sur les éléments extralangagiers de la classe de langue: un ancrage de l'analyse de discours dans la sociolinguistique”, communication présentée au colloque international du RFS (Réseau Francophone de Sociolinguistique): « Langue(s) et insertion en contextes francophones: discriminations, normes, apprentissages, identités... », organisé à l'Université Européenne de Bretagne-Rennes 2 (Rennes) par l'Université Européenne de Bretagne-Rennes 2, le PREFics

(Plurilinguismes, Représentations, Expressions Francophones - information, communication, sociolinguistique) et le LCF (Langues, textes et communication dans les espaces Créolophones et Francophones) UMR (Unité mixte de recherche) du CNRS (Centre national de la Recherche Scientifique), 17 juin 2009 (事前のレジユメの査読有) .

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 文也 (ISHIKAWA FUMIYA)
立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授
研究者番号：60295524

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし